№	提　案　名	提案団体名	
		代表者氏名	所　属
5	地域の縁側づくり ―ネオ駄菓子屋の可能性―	宇都宮活性化研究チーム	
		玉虫　彰一郎	宇都宮大学大学院　教育研究科

指導教官 氏　名	陣内　雄次

１．提案の要旨

現代の社会において近所付き合いがあまりされていないほど、コミュニティが希薄し、人と人とのつながりばかりか、地域を知らない（歴史や由来などを知らない）人たちが増えている。その中で、「居場所」づくりや「コミュニティ」づくりが全国で展開されているが、その取組みの 1 つとして「地域の縁側づくり」がある。「地域の縁側づくり」とは、昔の縁側のような気軽に人と交流のできる場をつくろうとする取組みである。私はその取組みの 1 つとして駄菓子屋を進化させた「ネオ駄菓子屋」を提案したい。「ネオ駄菓子屋」とは、普通の駄菓子屋に誰もが「気軽に」「都合のよい時に」来られるような要素を含んだ場である。例えば、子育て相談ができるところ、高齢者福祉センターを兼ね備えたところ、子どもに昔の遊びや町の歴史を教える人がいるところなどである。現状では、駄菓子屋は減少し、住民の地域活動への参加意向もよくない状態である。ネオ駄菓子屋はただ駄菓子屋の減少を止めるだけでなく、人々の交流の場・参加の場を与える機会の場である。

課題としては、ネオ駄菓子屋を誰が・どこで・運営資金面などがあげられる。そこで、施策事業の提案としては、①既存の駄菓子屋をネオ駄菓子屋へ脱皮　②ネオ駄菓子屋による担い手（人材）の養成　③空き店舗、福祉・公共施設の活用　を挙げる。また、ネオ駄菓子屋のネットワーク化、ネオ駄菓子屋サポートセンターの設置、懸賞事業を行うなどをして、住民・行政・地域をネオ駄菓子屋がつなげる役割を果たしていくのである。

２．提案の目標

●地域での「つながる」ちからの向上

昔は、気軽に人々が集い、談笑し、ひと時を過ごすなど人と人、人と地域をつなぐ場であった「縁側」が多く存在していた。このような「縁側」は減少し、近年地域で見守り、支えあう仕組みが希薄化・形骸化によって、コミュニティの形成が叫ばれている。一方では昨今、小学生に対する痛ましい事件が起き、これを発端として、学校・保護者などだけでなく近隣の住民や商店など地域全体で子どもたちを守る動きが高まっている。ある特定の団体や場所、活動だけではなく地域全体で取り組むことが増えてきている。地域全体で取り組むには、その中の人と人、人と地域のつながりが強くなくてはならない。そこで、昔の「縁側」に似た、地域における「縁側」づくりの取組みによって、「つながる」ちからを向上して、人々が支えあっていける社会を創っていく。

●新しい機能をもった駄菓子屋を増やす

新しい機能をもった駄菓子屋をこの提案の 1 つのキーワードにしたい。昔の駄菓子屋といえば、下校途中の子どもが 10 円程度の駄菓子を買いに集まり、店番のおばちゃんとの会話したり、集ま

った子どもたち同士で遊んだりする言わば、子どもにとって居場所であった。ここでは子どもだけでなく、人と地域をつなげる場となりうる「ネオ駄菓子屋」を提言したい。ネオ駄菓子屋は、子どもやその保護者、高齢者などその地域に住む人々が気軽に立ち寄り、そこで子ども同士は遊び、高齢者は子どもに町の歴史や昔の遊びを教えたり、保護者同士では生活の情報交換・子育て相談など様々な交流をする場である。ネオ駄菓子屋は特定の人への「居場所づくり」ではなく、様々な人の「居場所」、すなわち「地域の縁側づくり」の取組みの 1 つとして地域に広めていきたいと考える。この「縁側」を既存の駄菓子屋や空き店舗など様々な場所に仕掛け、増やしていくことにより、ある所は子育ての親がよく集まる場、一方では高齢者と子どもの交流の場であったりと、例え機能は同じでも各々で違った交流があり、住民は選択し都合のよい時に気軽に訪れることができる。